

蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵 『和漢朗詠集』の漢字音

Sino-Japanese Phonetic Glosses in *Wakan Roeishu* from the Former Collection
of the Hachisuka Family in the Senshu University Library

加藤 大鶴

KATO Daikaku

概要

『和漢朗詠集』は藤原公任によって編まれた、11世紀における和歌と漢詩のアンソロジーとも呼ばれる資料である。『和漢朗詠集』は夥しい写本群が存することもあってか、日本語史の資料としては十分に整理されてきているとは言えず、また漢字音研究の資料としてはその価値は実証的にはほとんど確かめられていない。本稿では本資料の漢字音資料を分析し、その特徴を明らかにすることで『和漢朗詠集』を用いた漢字音研究の基礎を固めることを目的とする。

分析の結果、次の6点が明らかとなった。(1) 仮名音形から鎌倉時代初中期の特徴が見て取れる。そのことは奥書の記述と齟齬しない。ただし上帖（1251年加點）、下帖（1238年）のわずかな年代的な開きも部分的に確認できる。(2) 声点は漢音に基づく五声体系（平声軽点は認められるが入声軽点は認めがたい）が主体であり、呉音も交える。声点については上下帖で大きな質の違いは見られない。(3) 濁声点（双点）は次濁字に多く、これは漢音の特徴を反映している。全濁字にも比較的多いが、これは呉音の反映とみられる。(4) 漢音と呉音に限らず、連濁例が観察される。ともに鼻音韻尾字に後接する場合に著しい。(5) 『広韻』去声字・上声全濁字のうち1拍のものは上声化傾向にある。(6) 上昇調+上昇調（去声字+去声字等）、高平調+上昇調（上声字+去声字等）の組み合わせに現れる中低形は本資料ではほぼ回避されていない。回避例に見えるのも1拍去声字の上声化を反映しているに過ぎない。

本資料の漢字音は鎌倉時代初中期の特徴を基本的には有しつつ、漢音、呉音の語による読み分けが資料内に存在していることから漢語としての発音が指向され、音調実現に日本語の拍数が影響を与えていはずが、日本語アクセント体系に融和しきるような1語としての単位的結合までには及んでいない、と総括することができた。

1 はじめに

『和漢朗詠集』は藤原公任によって編まれた、11世紀における和歌と漢詩のアンソロジーとも呼ばれる資料である。このうち漢詩は基本的に訓読される形で、平安期以来貴族を中心とした層に口誦・朗詠されたことが知られる。中世に至れば藤原定家『明月記』に記されるように、幼童の教科書とし

でも盛んに用いられたとされ（川口久雄1965、菅野禮行1999）、訓読文としての漢詩文が初学者の口頭にも上っていたことが分かる。しかし『和漢朗詠集』は夥しい写本群が存することもあってか、日本語史の資料としては十分に整理されてきているとは言いがたい。特に鎌倉期以降の写本にはそれ以前にはほとんど見られなかった詳細な和訓や訓点を加えられるものが多く（片桐洋一1978）、その受容の裾野の広さからしても日本語史研究に資するところが期待されるのであるが、少なくとも漢字音研究の資料としてはその価値は実証的にはほとんど確かめられていないと言える。

ところで『和漢朗詠集』の漢字音を考える上では、朗詠の側面と学問としての受容の側面との両方を考えなければならないだろう。朗詠譜本の一つである『朗詠要抄』（天理大学図書館蔵本）からは『和漢朗詠集』773番「嘉辰令月歡無極 万歳千秋樂未央」が「カシンレイグエツクワンブキョク…」と音読（漢音による直読）されたことが伺えるが、このような直読の形態から次第に訓読の形態に移行していったと考えられている（川口久雄1965他）。また本文に付される博士譜は天台系の声明の影響を受けているとも考えられており、天台声明が漢音で読まれたことから『和漢朗詠集』が漢音読みを主体とした漢文直読から、漢音読みの漢語を交えた漢文訓読文へと変遷していっただろうことも推察される場所である。一方、学問的な受容の側面では、後に『和漢朗詠集私注』につながっていく家説として、菅家本、藤原南家本、江家本による注釈があるという（三木雅博2002、大曾根章介・堀内秀晃2018ほか）。以上の両側面がどのような関係にあって、それが漢字音史、日本語史にどう資するかということも未だよく分かっていないのである。

こうした『和漢朗詠集』をめぐる問題を考えるために、本稿では蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵本（以下本資料と呼ぶ）の分析から着手したい。本資料は専修大学図書館による複製^{*1}がある。またすでに西崎亨1987によって訓点の基礎的かつ総論的な分析がなされている。さらには刊行されているいくつかの鎌倉期写本の影印本^{*2}と比べると、字音注記数が豊富であり、他の写本と比較していく上で基礎的な資料となり得る。本稿では本資料の漢字音資料を分析し、その特徴を明らかにすることで『和漢朗詠集』を用いた漢字音研究の基礎を固めることを目的とする。

2 専修大学蔵本『和漢朗詠集』について

本資料（蜂須賀家旧蔵、専修大学図書館蔵）は上下二帖あり、両奥書によれば上帖は高辻長成（菅長成、1204-1281）による自筆本、下帖はその子清長（1237-1303）による転写本であって、上下揃いではあるものの各々別の手によってなされたことが分かる。以下に上帖と下帖の奥書を示す（改行は」で示した）。

*1 専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊第一期第七回配本『和漢朗詠集』専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊刊行会、1981による。本稿の調査もこの複製本に拠った。

*2 字音注記のある漢字数だけで比較すれば、某氏蔵正安二年移点本（上巻一軸、藤原南家、複製日本古典文学館第1期37、日本古典文学刊行会、1975）では約1700字、暦王二年書写本（佐藤道生『三河鳳来寺旧蔵暦応二年書写和漢朗詠集影印と研究』勉誠出版、2014）では約2600字、本資料は約4100字に上る。

(上帖)

舊本令紛失而家者欲被奉校 當今之間 新書寫之隨家者令讀給愚身執筆點之 末代以之可爲 證本歟 菅長成 于時建長三年十二月廿九日 侍御讀异 文章博士菅長成 (花押)

(下帖)

本書奥書云 嘉禎四年三月廿一日於遮那院書之 以菅氏十二代之餘裔 十二代者菅氏始自大夫殿迄歟 帝王四代之御侍讀大藏卿爲長自筆自點之本 雖寫之惡筆之習定有誤之歟 右點者唯左帖云々 學本書之 正元々年十月十四日以訓說授釋三妙外了 上州前史菅在判

奥書から考えられる上下帖成立の経緯は複製本の解題(中田武司1981)に詳しい。またそれを訓点の面から検証した西崎亨1987(以下西崎論文)にも詳細な分析がある。これによれば、まず嘉禎四年(1238)に長成の父為長(1158-1246)が伝来本を基に為長本を書写したこと、それが上帖の奥書に示される「舊本」と解釈される。この「舊本」が建長三年(1251)に紛失したため、長成が証本を新たに書写し自ら加点した。さらに正元元年(1259)に長成の子である清長は祖父にあたる為長本を「學本」として書写する機会を得た。本来は別の書写であった両本がこうして現存の形態で伝来した由である。以上からすると、上帖は1251年に長成が加点し、下帖は1238年に為長が加点した本を清長が書写したということになる。この通りであれば本資料に現れる漢字音も鎌倉初期から中期のものを反映すると見てよいことになる。両本の加点年代は時期的にそう離れていないが、次節で仮名音形を取り上げるに際しては一応分けて集計しその特徴を考察することにする。

さて、漢字音の注記は基本的には漢字の右傍に墨筆片仮名で記される。声点は圏点、濁声点は双点である。音合符、訓合符や返り点なども墨筆で記される。注記の殆どは本文と同筆であるように見受けられるが、稀に片仮名の字体、文字の大きさや書きぶりから明らかに異質で後の書入れと思しきものもある*³。分析に際してはこれらはできるだけ集計から外してある。この他朱筆でヲコト点、句切れ点が記されるほか、片仮名による音訓や合点、声点もわずかに見受けられた。朱筆による合点は墨筆による注記に対して記される場合もあるので、墨筆による注記が先で朱筆はその後によってなされたのであろう。西崎論文によれば上帖・下帖ともこれらの訓点は紀伝点であるとする。以上を踏まえ、次節以降では西崎論文による漢字音注記に関わる指摘を踏まえながらも仮名音形の分析を行い、その後で西崎論文が詳細には取り上げていない漢字音の声点の分析を行う。

3 仮名音形について

3.1 m 韻尾字と n 韻尾字

規範的な日本漢字音では、m 韻尾字(深摂・咸摂、唇内韻尾字)は「一ム」、n 韻尾字(山摂・臻摂、

*³ 西崎亨1987では上帖・下帖の仮名字体表を掲げながら、いずれも別筆による後筆が加わっていると指摘している。

舌内韻尾字)は「一ン」となる。これらは平安期には区別を保ったが、院政鎌倉期には違例が現れ、鎌倉期には区別が消滅するとされる(沼本克明1986)。『蒙求』諸本の研究によると、鎌倉中期から後期にはこの書き分けはほぼ失われたと考えられている(佐々木勇2009, p.124)。13世紀書写の論語古写本では書き分けが失われた結果「ン」表記に合流する(石山裕慈2008)ほか、14世紀に書写されたという醍醐寺本『本朝文粹』でもこの書き分けは失われている(石山裕慈2009)という。

本資料でも、表1に見るように、この書き分けは完全に混乱していることが分かる。この点、西崎氏による指摘を確かめた形となる。上下帖では下帖に「ム」表記が多いが、いずれの韻尾字に偏りが見られるものでもない。両帖の混乱の仕方、表記傾向が違うだけである。深^{シン} [1-17b3] と深^{シム} [1-36b3]、談^{タン} [2-23b5] と談^{タム} [2-34b6]、簾^{テン} [1-23b4] と簾^{テム} [1-39a7] などのように、同字であっても表記には両様が見れる場合もあるが、これも西崎氏によってすでに明らかにされている。

		一ム	一ン	合計
m 韻尾字	上帖	16	19	35
	下帖	48	21	69
n 韻尾字	上帖	52	62	114
	下帖	137	92	229
合計		253	194	447

表1 n 韻尾字と m 韻尾字の現れ方

3.2 ㊥ウ韻字と㊦ヨウ韻字

規範的な日本漢字音では、效撰蕭・宵韻は㊥ウ、通撰鍾韻、曾撰蒸韻は㊦ヨウ(ヨウ)となることが知られる(沼本克明1986)。このうち㊥ウと㊦ヨウ(ヨウ)はいずれも拗長音の[-jo:]に合流したために、院政期から表記としても混乱するに至るといふ。また『蒙求』写本群では鎌倉時代中期以降から混乱が増加するという(佐々木勇2009, pp.116-120)。ただし14世紀に書写されたという醍醐寺本『本朝文粹』でもこの混乱は認められるものの、概ね規範的な区別を保っている(石山裕慈2009)。こうした文献ごとの傾向の違いは、時代的な差というよりも、漢字音学習の伝承や規範的な態度に異なりがあったことによると考えられよう。

本資料では表2に見るように、上帖と下帖とで傾向を異にする。まず㊥ウ韻では上帖では混乱は半数ずつだが、下帖では全例が㊥ウ表記を保持している。しかし㊦ヨウ韻では上帖に㊦ヨウ表記が保持される傾向にあり、下帖ではそれほどでもない。こうしてみると下帖のほうに書き分けの傾向が強いということが言える。特に㊥ウ韻は明瞭である。以下に具体例の一部を示す。

		㊥ウ表記	㊦ヨウ表記	合計
㊥ウ韻字	上帖	12	12	24
	下帖	23	0	23
㊦ヨウ韻字	上帖	3	12	15
	下帖	10	14	24
合計		38	24	62

表2 ㊥ウ韻字と㊦ヨウ韻字の現れ方

■㊥ウ韻字(效撰蕭・宵韻)

「㊥ウ」表記

(上帖) 蕭^{セウ} [1-06b5] 撩^{レウ} [1-08b5] 鳥^{テウ} [1-14b6] 昭^{セウ} [1-18b4] 眇^{ヘウ} [1-25a1] 表^{ヘウ} [1-27a4] …
 (下帖) 簫^{セウ} [2-03a2] 瓢^{ヘウ} [2-07a4] 藿^{テウ} [2-07a4] 瑤^{エウ} [2-09a3] 杪^{ヘウ} [2-12b4] 喬^{ケウ} [2-20a6] …

「㊦ヨウ」表記

(上帖) 廟^{ヒョー} [1-12a6] 表^{ヒョウ} [1-13b4] 詔^{ショウ} [1-16a1] 瀟^{ショー} [1-18b1] 瑤^{ヨウ} [1-27b4] 鈞^{チョウ} [1-28b2] …

■㊦ヨウ韻字 (通撰鍾韻、曾撰蒸韻)

「㊦ヨウ」表記

(上帖) 綾^{リョウ} [1-03a5] 應^{ヨウ} [1-08b3] 浴^{ヨウ} [1-13b1] 濃^{チョウ} [1-13b5] 龍^{リョー} [1-15a3] 鐘^{ショー} [1-15a3] …
 (下帖) 鐘^{ショウ} [2-04b1] 松^{ショウ} [2-08a5] 隴^{リョウ} [2-10a6] 頌^{ショウ} [2-12b1] 丞^{リョウ} [2-35a5] 陵^{リョウ} [2-36b5] …

「㊦ウ」表記

(上帖) 陵^{レウ} [1-07b3] 澄^{テウ} [1-26b6] 稱^{セウ} [2-06b2] 重^{テウ} [2-10b3] 龍^{レウ} [2-33b1] 籠^{テウ} [2-34a3] …
 (下帖) 稱^{セウ} [2-06b2] 陵^{レウ} [2-08a2] 重^{テウ} [2-10b3] 重^{テウ} [2-26b2] 籠^{レウ} [2-33b1] 籠^{テウ} [2-34a3] …

3.3 ㊦ウ韻字

規範的な日本漢字音での漢音では、通撰三等韻、遇撰虞韻、流撰尤・幽韻は㊦ウとなることが知られる。前項に示した拗長音化という観点では、もう一つ南北朝期に生じたとされる㊦ウから㊦ユウの変化がある(沼本克明1986, pp.255-256)。ただし平安後期ごろの文献でも通撰三等韻、遇撰虞韻では㊦ウと㊦ユ(またはユ)の表記上の揺れが見られるとされるので、ここでは比較的安定して㊦ウ形となる流撰尤・幽韻についてその現れ方を見ると、㊦ウ形がほとんどであり㊦ユウは1例しかなく分かる(表3)。

例外となるのは「由餘^{ユウ ヨ}」[2-44a2]のみである。

沼本克明1986, p.256によれば両者の合流はゼロ子音字であるイウから始まるという。本資料におけるこの例もゼロ子音字における変化であるから、先行研究による指摘に沿った事例であると言える。ただしこの例は本文の脱落を右傍

	㊦ウ表記	㊦ユ表記	㊦ユウ表記	合計
上帖	14	0	0	14
下帖	44	2	1	47
合計	58	2	1	61

表3 ㊦ウ韻(流撰尤・幽韻)字の現れ方

に書入れた部分に加点されており、清長が書写時に加筆したのかもしれない。この他、㊦ユ形をとるものには、醜^{シュ} [2-40a6]、籩^{シュ} [2-44a3]、酒^{シュ} [2-44a4]があるほか、呉音形である婦^フ [2-10b3]、浮^フ [2-11a4]、浮^フ [2-16b4]、浮^フ [2-30b1]、牛^ウ [2-21a2]、遊^ユ [2-45a5]などもあった。以下に具体例の一部を示す。

■㊦ウ韻(流撰尤・幽韻)

(上帖) 舊^{キウ} [2-11b5] 丘^{キウ} [2-12a2] 幽^{イウ} [2-12a6] 劉^{リウ} [2-12b1] 流^{リウ} [2-14b3] 舟^{シウ} [2-15a2] …
 (下帖) 留^{リウ} [2-03b2] 由^{イウ} [2-05b3] 猷^{イウ} [2-06b1] 舊^{キウ} [2-08b1] 丘^{キウ} [2-12a2] 幽^{イウ} [2-12a6] …

3.4 カ行合拗音

牙喉音における合拗音すなわちカ行合拗音字についても取り上げる。規範的な日本漢字音ではこれについては「クワー」「クキー」「クエー」などが現れるが、このうち「クキー」「クエー」は院政末期ごろから消滅し始め鎌倉時代後期になると直音「キ」「ケ」にほぼ統一されるという（沼本克明 1986, pp.257-258）。「クキ」「クエ」については『蒙求』写本群においてもやはり鎌倉時代後期から直音表記に多くなるとされる（佐々木勇 2009, pp.110-113）ほか、醍醐寺本『本朝文粹』でも直音しか現れない（石山裕慈 2009）。

本資料においては、まず「クワー」は上下帖ともに多数現れる。さらに下帖のみに「クキー」が例、「クエー」が11例現れた*4。就中、クキエム巻 [2-28a2] は中古音での発音* $g^h i w e n$ （再建音はカールグレンによる）の介音と合口性を、その仮名音形のなかに写し取っていると考えられる。上帖には現れない「クキー」「クエー」が下帖のみに現れるのは、下帖が鎌倉時代初期以前の漢字音を伝承しているためと考えられようか*5。

■ 「クワー」

（上帖）火 [1-21a2] 和 [1-40a1] 會 [1-23a3] 槐 [1-23b3] 款 [1-15b6] 關 [1-07a4] …
 （下帖）禍 [2-46b5] 檜 [2-18b6] 風 [2-11b1] 獲 [2-12a2] 滑 [2-18b1] 館 [2-30b6] …

■ 「クキー」

（下帖）魏 [2-04b1] 危 [2-18a5] 貴 [2-33b6] 郡 [2-13a3] 卷 [2-28a2] …

■ 「クエー」

（下帖）惠 [2-43b1] 闕 [2-17a5] 絃 [2-10a4] 元 [2-33a1] 原 [2-51a2] 卷 [2-32a4] …

3.5 唇内入声韻尾字

唇内入声韻尾（-p）字は中国語原音では内破音だが日本漢字音では平安後期には両唇摩擦音（-p > -Φu）で発音されるようになり、さらには日本語に生じた所謂ハ行転呼音によって1000年頃を境にウで発音されるようになるという（沼本克明 1986, pp.231-232）。『蒙求』写本群でも院政期

以前写本にも「一ウ」が現れ鎌倉期には増加していくことが見て取れる（佐々木勇 2009, pp.124-128）。本資料では、表4に示すように、両帖とも大部分が「一ウ」となっていることが確かめられる。

	一フ	一ウ	一ツ	一ン	その他	合計
上帖	1	8	0	2	2	13
下帖	2	30	3	0	1	36
合計	3	38	3	2	3	49

表4 唇内入声字の現れ方

*4 なおサ行合拗音も翠 [2-39a5] の1例のみ見られた。

*5 西崎氏は「はっきりしたことは言い得ないが、下帖の方に合拗音の表記例が上帖に比して多い」と指摘する。本調査によればカ行合拗音表記自体が多いことは動かないが、下帖のみに「クキ」「クエ」が現れる点が最も大きく異なる点であると言える。

唇内入声韻尾は無声子音が後続する環境では促音化しやすかったと考えられている（小松英雄1956）が、下帖に「一ツ」、上帖に「一ン」とあるのは、それぞれ異なる表記で促音化を写し取ったものであろう。「蕭^{セウ}颯^{サツ}（トテ）」[2-06a6]「接^{セツ}シ」[2-13b2]、「^カ盞^ホ-浦（ノ）」[2-38a5]はいずれも無声子音が後続する唇内入声韻尾字である*6。「^{カン}盞^ホ-浦ニハ」[1-28a6]、「^{セイ}蕭^{サン}/^{サツ}タル」[1-23a3]（左傍「サツ」は別筆）などの「一ン」表記も、無声子音が後続する環境にあり、促音による実現を写し取ったものと考えられる。喉内入声字の「^{ラン}落-花」[1-14b5]も促音化した事例とみられ、上帖の表記方針が伺われる。

この他、上帖には「一ム」表記もわずかに見られる。「^コ古^{シユム}-集（ノ）」[1-18b5]、「^{サム}颯^キ-々」[1-24a3]の2例がある。舌内入声音においても「一ム」表記を取る「^{セム}雪^{ベン}-片（ヲ）」[1-21a5]、「^{ヘム}別^{ルイ}-涙ナル」[1-24a4]の2例があり、入声音の閉鎖性を「一ム」で表記した場合もあったと考えるべきであろう*7。もともと本資料に加点された時代からすると、ほとんどが-p = 「一ウ」、-t = 「一チ」「一ツ」で定着しているのであるから、こうした「一ム」表記は前代の表記法が化石的に残ったと考えるべきであろう。

3.6 仮名音形についてのまとめ

以上、本資料を上帖と下帖に分け、仮名音形の諸特徴を見てきた。上帖は建長三年（1251）に長成が自ら加点し、下帖は嘉禎四年（1238）に為長が加点した本を正元元年（1259）に清長が書写した。奥書の通りであれば、上帖は1251年の加点、下帖は1238年の加点となる。このわずか十数年の差がどれほど資料から読み取れるかであるが、(1) m 韻尾・n 韻尾の書き分けは両帖とも混乱している（西崎論文の確認）。ただし下帖は「ム」表記に偏りがある、(2) ㊦ウ韻と㊧ヨウ韻の書き分けについては、上帖は㊦ウ韻は㊦ウ表記と㊧ヨウ表記で混乱するが下帖は㊦ウ表記を保つ、㊧ヨウ韻はいずれも混乱するがやや㊧ヨウ表記を保持する傾向にある、(3) ㊩ウ韻は㊩ウ表記をほぼ保持する、(4) カ行合拗音については両帖とも「クワ」表記は豊富に現れるが（西崎論文の確認）、「クキ」「クエ」は下帖のみに現れる、(5) 唇内入声韻尾は-p > -Φu > -u を経て両帖ともほぼ「ウ」表記となっている。ただし無声子音が後続する場合の促音化現象も部分的に観察され、上帖は「ン」表記、下帖は「ツ」表記を取る、といった相違点・共通点の確認できた。

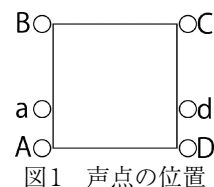
*6 「四^{シチ}-^{セキ}士^シ-尺」[2-04a1]は「一チ」表記であるがこれも促音化とみなしてよいかは分からない。

*7 沼本克明1986, p.134, 170によれば、平安中期資料に-m, -n, -tの各韻尾に「一ム」表記が現れる場合が紹介されており、閉音節の閉鎖性を写し取ろうとしながらも表記の未分化が現れたものと考えられている。平安後期にも同様の表記が見られるという。この点について西崎氏は「一度唇内入声韻尾が促音化し、「ツ」表記を経て、tをもnをも表わす、同一符号としての「レ」がある様に、本書では「ン（ム）の音価が、tをもnをも表わすものとなった結果なのか、あるいは又、仮名書往生要集の「大しむ（集）経」の例の存することをも考慮すれば、唇内入声pを、記号としての「ン（ム）」で表わす場合もあったのかもしれない」と説く。しかし本資料の舌内入声音の促音化例が上帖で「一ン」表記、下帖で「一ツ」表記とあること、「一ム」表記は促音化を生じたと考えにくい環境であるから唇内入声韻尾の閉鎖性を写し取ったものと考えて、「一ン」表記と「一ム」表記は異なる音声を表すとみるべきと思われる。

(2) (4) からは下帖の時代的な古さ、あるいは規範性の保持がいくらか見て取れるが、(1) (3) (5) からはいずれも鎌倉時代初中期的な特徴が見て取れる。こうした特徴は奥書とも齟齬しない。以上の検討を踏まえた上で、次節以降では声点の分析を行う。

4 声点の認定と体系

「はじめに」に記したように、『和漢朗詠集』は各種朗詠譜によると基本的に漢音で朗詠されたと考えられる。そこで本資料の声点^{*8}も漢音で読まれたという予測にたって、中古音の枠組み（実際は『広韻』に代表させる）にしたがって、分類を行う。日本が中国から受容した漢音は唐代末期ごろの長安音を母体としており、その声調はそれぞれ『広韻』でいう (1) 平声次濁・全濁字、(2) 平声全清・次清字、(3) 上声全清・次清・次濁字、(4) 上声全濁字・去声字、(5) 入声全清・次清・次濁字、(6) 入声全濁字の六声体系（調類）をなすとされる（柏谷嘉弘1965、沼本克明1973a）。これらが漢字の周囲の位置における点（図4）との間に、(1) : A、(2) : a、(3) : B、(4) : C、(5) : d、(6) : Dの対応をなすときに、それぞれの声点を認定することができる。



さて、表5（上帖）・表6（下帖）をみると、まずいずれもAが平声点、Bが上声点、Cが去声点、Dが入声点であることは明らかである。次にa点は上帖では平声全清・次清字で17%（59/331例）、下帖では37%（251/674例）となっており、いずれも平声軽点を認めることができようが、全体としてA点のほうが多数を占める結果となっている^{*9}。このように本来a点であるべきものがA点で加点されるのは『蒙求』院政後期点にもすでに見られる（佐々木勇2009, pp.539-546）もので、珍しいことではない。本資料の場合は、上帖より下帖のほうに平声軽が多くより規範性を保持している点は仮名音形についての傾向と軌を一にする。d点は本来全濁音以外に対応するはずであるが両帖ともほぼ完全に混乱している。上帖にはその痕跡が見られなくもないが、清濁・全濁字にd点の傾向があるとする見方も容易には首肯しがたい。このように入声字に軽点を認定しにくいことも『蒙求』院政後期以降と同様である。上声全濁字は両帖ともC点に多く表れるのは、唐代末期長安音に生じたとされる上声全濁字の去声化を反映したもので、これも漢音資料にはよく見られる現象である。以上から分かるのは、本資料における漢字音の声点は日本漢音に典型的な五声体系（平声にのみ軽重を分かつ）を骨子としているということである^{*10}。

*8 先述の通り声点は圏点が基本だが、稀に字音の仮名音注や和語に差された星点もある。これについては西崎亨1987に詳細な分析がある。

*9 こうした声点がどのような音調に対応するかについては、ひとまず定説に従って (1) 平声点 = 低平（拍に開いた場合はLまたはLL）、(2) 平声軽点 = 下降（FまたはHL）、(3) 高平（HまたはHH）、(4) 上昇（RまたはLH）とする（金田一春彦1951、加藤大鶴2017）。(5) 入声軽点（徳点） = 高平内破音（拍に開いた場合はHH）、(6) 入声点 = 低平内破音（LL）は本資料では区別がない。

*10 物理的位置としては個別的にa点・d点を観察することは確かにできるのであり、その意味で西崎論文では六声体系としたのであろうが、声点の内実から考えて五声体系とみなす。

		A	a	B	C	D	d	計
平声	全清	165	47	19	11	0	0	242
	次清	71	12	2	4	0	0	89
	清濁	107	4	5	3	0	0	119
	全濁	99	11	5	0	0	0	115
上声	全清	2	1	78	8	0	0	89
	次清	0	0	23	0	0	0	23
	清濁	4	0	78	7	0	0	89
	全濁	3	0	4	10	0	0	17
去声	全清	0	0	3	25	0	0	28
	次清	3	0	0	8	0	0	11
	清濁	0	0	10	21	0	0	31
	全濁	4	0	4	46	0	0	54
入声	全清	1	0	0	1	23	20	45
	次清	0	0	0	0	4	4	8
	清濁	0	0	0	0	23	11	34
	全濁	0	0	0	0	35	10	45
計		459	75	231	144	85	45	1039

表5 声点と広韻との対応表（上帖）

		A	a	B	C	D	d	計
平声	全清	255	185	34	49	0	0	523
	次清	69	66	6	10	0	0	151
	清濁	330	24	14	12	0	0	380
	全濁	279	30	10	12	0	0	331
上声	全清	4	1	65	1	0	1	72
	次清	0	3	29	2	0	0	34
	清濁	7	2	95	3	0	0	107
	全濁	1	0	17	29	0	0	47
去声	全清	15	2	11	108	0	0	136
	次清	1	1	0	47	0	1	50
	清濁	12	1	6	64	0	0	83
	全濁	17	1	5	126	0	0	149
入声	全清	1	0	1	0	54	55	111
	次清	0	0	0	0	14	23	37
	清濁	0	0	0	1	24	46	71
	全濁	0	0	0	0	38	51	89
計		991	316	293	464	130	177	2371

表6 声点と広韻との対応表（下帖）

なお、声点は1字に1つが基本だが、稀に1字に2つ差される場合がある。そのようなものは55例を数えた。その中には、三（東/去）尺（入濁/徳）[2-32a4]の去声点と入声濁点に合点が付され呉音であることが示されるものや、楚（去）-思（上/去）[1-25a1]の第2字における上声点に合点が付され1拍去声字の上声化が示されるもの（いずれも次節以降で取り上げる）など、合理的な説明が可能なものも含まれるが、合点が示されないものやなぜ2つの声点が差されるのかただちには解釈しがたいものが大半である。

4.1 呉音の混入について

前項の表5・6では対応に外れるものも散見される。これらの一部分は呉音に基づくと考えられる。「漢音ノ平声ハ呉音ノ去声也」（『法華経音義』）等で知られるようにまま漢音と呉音とで逆の対応をなす場合がある*11。そうした対応だけで呉音声調を認定することは困難である（加藤大鶴2007）が、次のようなものは仮名音形が呉音であることによっても、呉音声調を反映した声点であると認めて良いと考えられる*12。

■『広韻』平声で去声点となるもの

* 11 『広韻』声調とのずれの度合いは呉音声調体系に対する人工的な整備によって、時代を経るにつれて小さくなるとされる（高松政雄1980）が、呉音声調体系の本質的な部分では漢音声調と質的な異なりを有している。

* 12 当該字の仮名音注が呉音形を示していなくとも、語全体のなかに呉音読みを仮名音形を含むものも掲げた。本資料には漢呉音の混読も存するので厳密な処置ではないが、声点と仮名音形を総合的に判断した。

雌^シ(去) - 黄^{ワウ}(上) (ヲ) [1-15b6]、慈^シ(去濁) - 恩^{オン}(上) ニ [1-16a5]、招^{シヨウ}(去) - 涼^{リヤウ}(上) [1-18b4]、頭^ツ(去濁) - 目^{モク}(徳) (ハ) [1-30b5]、扉^{ヒキウ}(去濁) 風^フ(上濁) (ニ) [2-15a3]、眞^{シン}(去) - 珠^{シュ}(上濁) [2-18b1]、笙^{シヤウ}(去) ノ [2-20a6]、生^{シヤウ}(去濁) (ニ) [2-21a2]、赤^{シヤク}(入) 梅^{ヘイ}(去) 檀^{タン}(上濁) (ヲ) [2-25a3]、拔^{ハツ}(徳濁) - 提^{タイ}(去濁) 河^カ(上濁) ノ [2-25a4]、漬^{シヤウ}(去) - 涼^{リヤウ}(上) (ノ) [2-26a2]、浮^フ(平) - 生^{シヤウ}(去) (ヲ) [2-30b1]、堂^{シヤウ}(去濁) 樂^{ラク}(入) (ノ) [2-33a5]、一^{イチ}(入) - 生^{シヤウ}(去) (ノ) [2-41b1]、和^ワ(去) - 琴^{コン}(上濁) [2-42b2]、梅^{ヘイ}(去) 檀^{タン}(上濁) (ノ) [2-50b6]

■ 『広韻』 去声で平声点となるもの

詔^{シヨウ}(平濁) - 紙^シ(二) [1-16a1]、生^{シヤウ}(平) - 衣^イ(平) ハ [1-16b6]、淨^{シヤウ}(平濁) - 侶^{リョ}(上) (ハ) [2-27a2]、詔^{セウ}(平濁) [2-40b3]

呉音で読んだと思いきこうした例は、呉音読み語彙として固定化していたと考えられる。例えば本資料と同じく朗詠に関わる文献『本朝文粹』でも、巻によっては願文・諷誦文など仏教関係の文に呉音読み漢語が見られるという*13。他資料に目を広げると、「扉^{ヒキウ}(去濁) 風^フ(上濁)」俗 [前田本色葉字類抄2/094b/7]、「笙^{シヤウ}(去濁) 風^フ(上濁)」 [新猿楽記康永本100/13]、「笙^{シヤウ} 俗云象(去) 乃(上) 布(上) 江(上) [和名抄京本6-51b]、「一生^{シヤウ}(去)」 [新猿楽記古抄本068/12]、「和(去) 琴^{コン}(上濁)」ワコン [前田本色葉字類抄1/088a/7]、「梅檀^{ヘイタン}」此間云音善(去) 短(上) [和名抄京本10-72a] など、本資料における仮名音形・声点と同じ例をいくつか見つけることができる。

冒頭に触れたように、本資料の漢語が主として漢音読みであったことは内的徴証のみならず、朗詠譜本文の読みからも説明されることがある。しかしその朗詠譜にも、龍花^{リウカ}、三會^{サムエ} [天理図書館蔵朗詠要抄19] など呉音読み漢語であるものが散見される。この点では『和漢朗詠集』を学問の対象とする側面と朗詠譜本として側面とのいずれにおいても、その漢文訓読文は漢音学習を目的とした一面的な字音系統の採用ではなく、語音としての読みによって行われたと考えられるのである。

4.2 濁声点について

本資料の漢字音は漢文訓読された日本語文のなかにおける漢語として実現していた。ここでは漢語音における形態音韻論的な面に着目するために、漢語の連濁が生じているかを取り上げる。

まず本資料全体に現れる濁声点(双点)の傾向を捉えるために、『広韻』の枠組みにしたがって音節頭子音ごとに声点が単点か双点かを分類した(表7)。すぐに気づかれるのは次濁字に双点が多いことである。これは次濁字に含まれる明母(地(去) - 脈^チ(入濁) [1-29b1])、微母(蘇^ソ(平) - 武^フ(上濁) カ [2-51b4])、泥母(雲(平) 泥^チ(平濁) [2-48b3])、娘母(濃^{ネウ}(平

	単点	双点	合計
全清字	1343	62	1405
次清字	433	15	448
次濁字	713	418	1131
全濁字	800	108	908
合計	3289	603	3892

表7 単点と双点の現れ方

* 13 柏谷嘉弘・鶴岡昭夫2015, 第二冊第三節。ただし声点のみから字音系統を即断することの困難さと危険性を論じる石山裕慈2009の指摘もある。

濁) -^{キヤウ}香(平) [1-11b3]、日母(^{シツ}乳(去濁)(ヲ) [2-38b5])が中国語原音における非鼻音化現象(水谷真成1957)を経て漢音においてはバ・ダ・ザ行で現れること、また疑母(^{リウ}柳(上) -^{カン}眼(上濁) [1-02a1])がガ行で現れることを反映している。次濁字ほどではないが全濁字にも双点がやや目立つ。一般的に呉音では全濁字は濁音で実現するとされ、^ツ頭(去濁) -^{モウ}目(徳)(ハ) [1-30b5] および前項に示したようないくつかの事例はそれにあたと考えられるが、双点で実現する全濁字はすべて呉音を反映するなど機械的に処理できないことは、^{クフ}畫(去濁) -^ト圖(ノ) [2-39a3] のような事例があることから分かる。ともあれ、次濁字に漢音の特徴から双点が多く差されること、全濁字には呉音の特徴を反映するものが多いために双点が多く差される、とは概略的に言えることであろう。

こうした例を除外してみると、『広韻』との対応関係からは全清・次清字が濁音として実現する特段の理由は考えられないから、ここに連濁例が現れている可能性がある。そこで双点が語頭、非語頭のいずれに現れるかを次濁字、全濁字、全清・次清字で見ると、全清・次清字の双点例に明らかに非語頭環境が多い。漢語の連濁例は前接字が鼻音韻尾(-m、-n、-ŋ)である場合、また前接字が去声字である場合に多いとされる(奥村三雄1952)。この現象は呉音に著しいが、漢音においても生じることが指摘されている(沼本克明1973b)。本資料と同じく朗詠資料である『本朝文粹』においても漢音の連濁例が見られるという(佐々木勇2009, pp.371-372)。いま、漢音読み漢語か呉音読み漢語かを分けず、全清・次清字の非語頭例について、その前接字を2字漢語に限って調べると、零母音字7例、母音韻尾字4例、p韻尾字1例、m韻尾字13例、n韻尾字15例、ŋ韻尾字27例であって、大部分が鼻音韻尾字であることが分かる。

	次濁字	全濁字	全清・次清字	合計
語頭	201	55	10	266
非語頭	216	51	67	334
合計	417	106	77	600

表8 語頭／非語頭環境における双点の現れ方

(前接字がm韻尾字)：三(東/去) -^フ分(平濁/東) [1-29b5]、三(去) -^フ分(平濁) [1-39a6]、三(去) ^チ千(上濁) 界 [1-42b4]、三(去) ^チ千(上濁) 世(平) 界(平) (ハ) [2-24a2]、三(去) ^チ千(上濁) [2-27b5]、三(去) ^チ千(上濁) 里(平) [2-48a5]、今(去) -^シ生(上濁) [2-24b2]、三(去) ^ヒ百(入濁) -^シ盃(上) [2-30a2]、三-^ヒ百(入濁) 盃(東) (ト) [2-38a6]、三(東) ^尺尺(入濁?) (ノ) [2-37a4]、三(去) -^尺尺(徳濁) [2-37b5]、三(東/去) ^尺尺(入濁/徳) [2-32a4]、南(平) ^山山(東濁) (ノ) [2-35a5]

(前接字がn韻尾字)：^{セン}善(平濁) ^フ根(去濁)(ヲ) [1-20a6]、^シ眞(去) -^珠珠(上濁) (ニ) [1-37b5]、^シ眞(去) -^珠珠(上濁) [2-18b1]、^フ轉(平濁) ^法法(入濁) 輪(去) (ノ) [2-24b3]、引(平) -^{セウ}擡(入濁) (ス) [2-25a1]、安(去) ^屈屈(上濁) [2-25a3]、神(去濁) -^通通(上濁) (ヲ) [2-25b4]、人(去) -^間間(上濁) (ノ) [2-28a3]、文(平濁) -^章章(平濁) (ヲ) [2-37b4]、邊(東) -^ト土(東濁) (ハ) [2-38a6]、^{エム}宛(上) ^{テム}轉(上濁) タル [2-40a3]、遠(上) 山(平濁) (ノ) [2-40a3]、^歳万歳(去濁) [2-49a1]、春(東) -^秋秋(平濁) [2-49a2]、年(東) ^{ヒム}鬢(去濁) (ノ) [2-52a2]

(前接字がη 韻尾字):空(東)-山(上濁)(ニ)[1-13a5]、青(平)山(東濁)[2-03b5]、青(東)山(東濁)(ニ)[2-05a6]、青(東)山(平濁)(ハ)[2-21b5]、商(平)-山(平濁?) (ニ)[2-20b1]、商(平)山(平濁)(ノ)[2-43b1]、重(平)-山(平濁)(ニ)[2-24b1]、清(平)-脆(去濁)トシテ[1-25a1]、征(平)-戍(去濁)セル[1-28a3]、往-反(上濁)[1-34b5]、黄(平)-醯(平濁)[1-40a5]、佛(入濁)-名(去)經(上濁)[1-44b3]、庚(去)申(上濁)[2-01b4]、庚(去)申(上濁)(ヲ)[2-31b6]、庚(去)申(上濁)[2-32a1]、丞(東)相(去濁)[2-01b4]、将(去)軍(上濁)[2-01b5]、王(平)昭(去濁)君(東)[2-01b5]、迸(去)-筭(上濁)[2-06b4]、屏(去濁)風(上濁)(ニ)[2-15a3]、屏(去濁)-風(上濁)[2-34a4]、向(去)-背(去濁)ヲ[2-15b5]、兩(平)足(入濁)(ヲ)[2-25a5]、榮(平)啓(上濁)期(平)(カ)[2-33a5]、陳(平)-丞(平)-相(去濁)(カ)[2-35a5]、兩(上)-鬢(去濁)(ハ)[2-40a3]、風(東)-光(平濁)(ハ)[2-48a5]

これらのうち、前接字がm 韻尾字を見ると三-を第1字に持つ漢語には、去声点が差される呉音を反映するかと考えられるものと、東点が差される漢音を反映するかと考えられるものとが散見される。前接字がn 韻尾字でも、「善根」「真珠」「人間」等呉音であろうと考えられるものの他、「文章」のように漢音を反映すると考えられるものもある。前接字がη 韻尾字でも呉音を反映すると考えられる「佛名經」などの他、「青山」など漢音と考えられるものがある。全ての語について、漢音読みであるか呉音読みであるかを峻別することは難しいが、呉音漢語の場合は前接字に去声点が差されるものが多い一方、漢音漢語にはそのような傾向は見られない。すなわち、本資料の連濁の傾向は先行研究が指摘する傾向と齟齬がない結果であると言ってよい。

4.3 1拍去声字の上声化について

呉音における去声字が2拍字では去声、1拍字では上声に偏ることが古くから指摘される(奥村三雄1961)。これは去声字の上昇調が2拍字では安定し、安定が困難な1拍字では高平調に変化したことを反映すると考えられてきた。この変化は漢音資料においても観察されることが佐々木勇2009, p.562で指摘される。

本資料においても表9に示すように、『広韻』去声字では全体として2拍字が多いにも関わらず、B点=上声点は1拍字への顕著な偏りが見られる。上声全濁字(全濁上声字の去声化が反映する)についても、同様の傾向が観察される。『広韻』上声全濁字でB点で現れるものの解釈は、上声を保持したのではなく去声化した中国語音を輸入したあとで1拍であることによって上昇調=Rを保つことがで

『広韻』	帖	B 点		C 点		合計
		1 拍字	2 拍字	1 拍字	2 拍字	
去声	上	11	4	21	82	118
	下	15	4	50	180	249
上声全濁字	上	3	1	3	7	14
	下	16	1	3	26	46
合計		45	10	77	295	427

表9 1拍去声字の上声化の度合い

きなくなり、高平拍 = Hとして実現したとみる。そうでなければ1拍字に偏って上声が保持されたというおかしな説明になってしまうからである。なお、具体例の中には^{シヤ}鸕(上/去) - ^コ鵠(平)ノ [1-34b3]、^ホ布(上/去) - ^マ渡去(ス) [2-07a6] (以上『広韻』去声字)、「^シ思(去) - ^フ婦(上/去)ノ」 [1-36b3] (以上『広韻』上声全濁字)のように、B点とC点が並記されるものもあった。

こうした傾向に、上帖・下帖の違いは見られない。以下に具体例の一部を示す。

■『広韻』去声字でB点となるもの

- (1拍字): ^{キョウキ}楊貴(上) ^ヒ妃(平) [1-27b6]、三(東) - 五(上濁) - ^チ夜(上)中(平)ノ [1-27a3]、十(入) - 二(上濁) - ^{クワイ}廻(ノ) [1-27a5]、葛(入) - ^チ稚(上) - 仙 [1-34b6]、瀑(入) ^フ布(上)ノ [2-03b6]、^キ驕(上) ^{ヘイ}兵(平) [2-06b2]、^{コウ}利(上) - 口(上)ノ [2-07b6]、且(去) ^ホ暮(上濁)ノ [2-19a6]、^ソ素(上) ^{リン}倫(平)ノ [2-21a4]、無(平濁) - ^イ爲(上)ノ [2-32b3] …
- (2拍字): 「竹^{エム}-^ニ院(上) (ニ) [1-06b6]、^ニ再(上) - 日(徳濁)ノ [1-13b4]、^{タウ}棹(上) ^カ歌ノ [1-28b2]、^{サイ}再(上) - 日(徳濁)ノ [2-30a5]、^{サイ}再(上) - 三(平) [2-43a1] …

■『広韻』上声全濁字でB点となるもの

- (1拍字): ^{セイ}盛(去) - ^カ夏(上) (ニ) [1-22b1]、^{ヘツ}別(入) ^ゾ緒(上) [1-24a2]、^コ孤(平) - ^フ婦(上) [1-42a1]、^道道(去) ^ト土(上) [2-01b1]、^妓妓(上) ^女女(上濁) [2-01b6]、^キ機(平) ^フ婦(上) (ニ) [2-10b3]、^{スエ}醉^{キヤウ}-^シ郷(東) ^シ氏(上)ノ [2-13a3]、无(平濁) ^ヘ何(上) [2-13b2]、^サ坐(上) ^{ハツ}亡(平濁)ス [2-13b2]、^ト杜(上) ^{シヤウ}若(徳濁) [2-16a4] …
- (2拍字): 龍(平) ^{カム}韻(上) [1-44a6]、早(上) ^{タウ}種(上) (ヲ) [2-22a4]

4.4 中低形の回避について

上昇調 + 上昇調 (去声字または全濁上声字の接続)、高平調 + 上昇調 (上声字に後接する去声字または全濁上声字) 環境では、中低形を生じるために後項の音調を高平調または低平調に変化する現象が知られる。これは呉音に特徴的な現象として知られていたが (奥村三雄1953他、桜井茂治1959他、沼本克明1971)、漢音にも生じることが分かってきた (加藤大鶴2015、2019)。この現象が本資料でも生じているかを示したのが表10である。表中『広韻』の去は去声字に上声全濁字も代表させ、上声字には全濁字を含めていない。

『広韻』	声点の組み合わせ				
	C + C	C + B	B + C	B + B	C + A
去 + 去	47	10	3	1	4
去 + 上	2	47	0	7	1
上 + 去	1	1	35	1	0
去 + 平	2	4	0	0	54
上 + 上	0	0	0	28	0

表10 中低形の回避

さて、網掛け部分を見ると『広韻』と声点に対応があることが分かる。中低形が生じているのは『広韻』で去 + 去かつC + C、および『広韻』で上 + 去かつB + Cであるが、これら中低形はほとんど回

避されていないといってよい。回避と考えられるうちやや数が目立つのは『広韻』で去+去かつC+Bのものである。これは一見、後項を高平調化させたものとも思われる。しかし下記の例からは「范蠡」を除いて全てが1拍字である。

異(去) 氣(上?) (ㄩ) [1-08b4]、盛(去) -夏(上) (ニ) [1-22b1]、楚(去) -思(上/去) [1-25a1]、思(去) -婦(上/去) ノ [1-36b3]、勝(去) -地(上) (ハ) [2-14a1]、范(去) 蠡(上) [2-15a6]、且(去) 臺(上濁) (ノ) [2-19a6]、澗(去) 戸(上) (ニ) [2-21b2]、布(去) 被(上) (ㄩ) [2-35a1]

中低形の回避ではない、下記の『広韻』で去+上かつB+Bも「旱稻」を除いてやはり全てが1拍字である。すなわち本資料においては中低形の回避はほとんど行われておらず、そのように見えるものは1拍去声字の上声化によるものとみるべきであろう。中低形回避は1語としての緊密さを反映する漢字音の日本語化の一現象と考えられるから、回避されていないとなれば、本資料の漢字音は音調の面からすると1字ごとの独立性が高いと考えざるを得ない。

臺(上濁) 雨(上) [1-14a3]、臺(上濁) -雨(上) (ノ) [1-33b4]、臺(上濁) -鳥(上) ノ [1-16a6]、利(上) -口(上) (ノ) [2-07b6]、妓(上) 女上(上濁) 上濁 [2-01b6]、旱(上) 稻(上) (ㄩ) [2-22a4]、巨(上) 海(上) (ノ) [2-25a2]

5 おわりに

以上、本資料の分析を通じて分かった主な結果を下記にまとめる。

1. 仮名音形から鎌倉時代初中期の特徴が見て取れる。そのことは奥書の記述と齟齬しない。ただし上帖(1251年加點)、下帖(1238年)のわずかな年代的な開きも部分的に確認できる。
2. 声点は漢音に基づく五声体系(平声軽点は認められるが入声軽点は認めがたい)が主体であり、呉音も交える。以下、声点については上下帖で大きな質的違いは見られない。
3. 濁声点(双点)は次濁字に多く、これは漢音の特徴を反映している。全濁字にも比較的多いが、これは呉音の反映とみられる。
4. 漢音と呉音に限らず、連濁例が観察される。ともに鼻音韻尾字に後接する場合に著しい。
5. 『広韻』去声字・上声全濁字のうち1拍のものは上声化(B点が差される)傾向にある。
6. 上昇調+上昇調(去声字+去声字等)、高平調+上昇調(上声字+去声字等)の組み合わせに現れる中低形は本資料ではほぼ回避されていない。回避例に見えるものも1拍去声字の上声化を反映しているに過ぎない。

本資料の漢字音を全体としてみると、呉音読み漢語を交える点、連濁例を交える点、1拍去声字の上声化を交える点などから、日本語化を経ていることが確認される。本資料を和化漢文訓読資料として見た場合、久遠寺本『本朝文粹』が漢籍訓読資料である金沢文庫本『群書治要』よりも日本語化されているという指摘（佐々木勇2009, p.727）が想起される。そこで評価の基準に用いられる1拍去声字の上声化でみると、本資料は『本朝文粹』に近い傾向を有する。一方、中低形回避については『本朝文粹』5種の写本について分析した石山裕慈2011によると、『本朝文粹』では中低形回避の傾向が少なくないということであり、『和漢朗詠集』諸写本についてのさらなる分析結果と比較する必要がある。本資料全体としては漢音、呉音の語による読み分けが資料内に存在していることから漢語としての発音が指向され、音調実現に日本語の拍数が影響を与えてはいはするが、日本語アクセント体系に融和しきりような1語としての単位的結合までには及んでいない、と総括することができよう^{*14}。これは鎌倉時代初中期における和化漢文訓読資料の漢字音の類型の一つとまずは位置づけて良いものと考えられる。

本稿では『和漢朗詠集』の鎌倉期写本に観察される漢字音の学問的受容のひとつとして、菅家の資料を取り上げた。今後は現存する藤原南家による写本との比較を通じて学問的受容上の位置づけを確かめながら、朗詠譜との関係から音調上の問題を考えたい。

参考文献

- 石山裕慈 2008「論語古写本における漢字音について」日本語学論集4
 ——— 2009「醍醐寺本『本朝文粹』の漢字音」訓点語と訓点資料122
 ——— 2011「『本朝文粹』における漢語声調について」訓点語と訓点資料126
 大曾根章介・堀内秀晃 2018「『和漢朗詠集』解説」『新潮日本古典集成〈新装版〉和漢朗詠集』新潮社
 奥村三雄 1952「字音の連濁について」国語国文21-6
 ——— 1953「音節とアクセント—呉音声調の国語化—」国語国文22-11
 ——— 1961「漢語のアクセント」国語国文30-1
 柏谷嘉弘 1965「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」国語学61
 柏谷嘉弘・鶴岡昭夫（編）2015『日本古典漢語語彙集成』勉誠出版
 片桐洋一 1978「解説」『陽明叢書国書篇第七輯 和漢朗詠集・新撰朗詠集』思文閣出版
 加藤大鶴 2007「呉音系字音を反映する二字漢語の抽出方法：『半井家本医心方』を用いて【附資料】」国語学研究と資料30
 ——— 2015「去声字の低起性実現から考える漢語アクセントの形成プロセス—『新猿楽記』の漢音語彙と呉音語彙を比較して—」訓点語と訓点資料135
 ——— 2017「字音下降拍はどのように実現したと考えるか：金田一春彦『日本四声古義』での音調推定をめぐって」

* 14 この点は『本朝文粹』全体としての総括と関連のある結論に至っている。石山裕慈2011によれば、ある漢語に着目したとき写本間のみならず同一の本においても声点が揺れて現れることが観察されるとして、「『本朝文粹』の字音声点というものが『日常漢語』に近い存在であるとも考えがたい」と結論づけている。

て」論集13

- 2019「漢音漢語における去声+去声の接続および後項の「声調」変化: 尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』(三卷本)を用いて」論集15
- 川口久雄 1965「『和漢朗詠集』解説」『日本古典文学大系73 和漢朗詠集・梁塵秘抄』岩波書店
- 金田一春彦 1951「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版会
- 小松英雄 1956「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程」国語学25
- 桜井茂治 1959「漢語アクセントの国語化主として「出合」以前について」國學院雑誌60-9
- 佐々木勇 2009『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』汲古書院
- 菅野禮行 1999「『和漢朗詠集』解説」『新編日本古典文学全集19 和漢朗詠集』小学館
- 高松政雄 1980「呉音声点の性格」国語国文49-3
- 中田武司 1981「『和漢朗詠集』解題」『専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊和漢朗詠集』専修大学出版局
- 西崎 亨 1987「蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵『和漢朗詠集(菅家相伝本)』の訓点」武庫川国文29
- 沼本克明 1971「毘富羅声の機能」国語学84
- 1973a「唐末上声全濁字の去声化を通じて見たる日本漢音の体系について」国語と国文学50-2
- 1973b「漢音の連濁」国語国文42-12
- 1986『日本漢字音の歴史』国語学叢書1期10東京堂出版
- 三木雅博 2002「『和漢朗詠集』博士家写本の解説—学術的情報としての〈注記〉の読み取り—」院政期文化論集2
- 水谷真成 1957「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」東洋学報39-4

* 本研究は「『和漢朗詠集』鎌倉期写本の漢語声点についての基礎的研究」(令和3年度 跡見学園女子大学 特別研究助成費)の成果の一部である。